

今日のテーマは「互いに罪を告白する」です。これを見て、緊張したり、重く感じる気持ちになったりする人がいるかもしれませんが心配しないでください。罪を告白する目的は私たちが面目を失ったり、恥ずかしい思いをするためではなく、恵みを得るためです。

聖書で使われている「告白する」ということには「同じことを言う」つまり、話していることと本人が一致しているという意味があります。ですから、罪を告白するとは、罪について神が言われるのと「同じことを言う」ことなのです。つまり、自分が罪を犯したことを認め、その罪の責任が自分にあることを認めるということです。「私は罪深いな～。でも私だけではないし」とか「この手が悪いんだ。この口が悪いんだ。場合によっては、悪霊か何かに憑かれているんだ。」といったことではなく、「私が罪を犯した」、「私は罪びとなんだ」と素直に認めることです。そうする時に聖書は「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」第一ヨハネ 1:9 と本当の赦しと平安を覚えることを約束しています。聖書は私たちの罪を赦すことが出来る方はキリストだけであること、またクリスチャンはどんなときでも、どこにいても、キリストのもとに行くなら罪が赦されることを明確に教えています。これは全ての人に語られていることです。まだクリスチャンで無い方にとっては罪悪感、孤独感、怒り、赦せない思い、そういったものを解決する力は自分の内側から出てきません。人に期待してもすぐに限界を知ることになります。クリスチャンになるとは正直に告白する時にちゃんと耳を傾け、赦しを与えてくださるお方、イエス・キリストなる神との交わり、絆を持つということです。自分の罪を認め、告白し、イエス・キリストの十字架の贖いを信じた時にキリストなる神様との絆、つながりが出来るのです。

また信じた後もクリスチャンにとっては罪を告白するのはキリストのからだなる教会の交わりを豊かなものにしてゆくために必要だからです。どんな罪を犯したとしても私たちは神の家族の一員であることには変わりありません。クリスチャンが罪を告白するのは、もう一度神の家族に入れてもらうためではありません。神との豊かな交わりを回復するためです。さらに罪の告白をするのは「ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表し、互いのために祈りなさい。いやされるためです。義人の祈りは働くと、大きな力があります。」ヤコブ 5:16 とあるように癒されるためなのです。「罪の赦し」は神から与えられますが「いやし」は交わり、共同体の中で告白し合う時に与えられるのです。ですからヤコブは何か尋問をされたように全てを話しなさいと言っているのではなく、それを言い合える関係の中で癒しが起こるのだと言っています。もし、クリスチャン生活、信仰生活が長く、それなりに歩んできたつもりだがどうも成長しているような気がしない。信仰生活がマンネリ化しているように思うなら、一つの理由はこのあたりにあるかもしれません。もちろん、外側に問題があるかもしれません。でも何を学んでも、どこに行っても不全感があるとすると自分自身の中にあるかもしれません。ですから神に対して、人に対して罪を告白することは非常に重要でその人の永遠のいのち、教会の交わりの豊かさに大いに関係してくることなのです。前置きが長くなりました。前置きというよりメッセージの中心を最初に話した感じですが罪を告白することにおいてこの土台、基本になるのはイエス・キリストをどのようなお方として見るかということです。そのことを今日の聖書箇所から見たいと思います。

ルカはここで、シモン・ペテロ達が主イエスの弟子となっただけを語ってくれています。シモン・ペテロは今日の箇所でも主イエスと出会ったわけではありません。シモンは既に主イエスを知っていました。以前、主イエスはある安息日にこのカペナウムの町の会堂での礼拝において教えを語り、悪霊に取りつ

かれた人を癒されました。その礼拝の後、シモン・ペテロの家にお入りになったのです。それはシモン・ペテロが主イエスを家に招いたということです。シモンはカペナウムの会堂において既に主イエスの教えを何度か聞き、感銘を受けたので、ある安息日の礼拝の後、自分の家に主イエスを招いてさらに教えを聞き、もてなしをしようとしたのです。しかしあいにくこの日、ペテロのしゅうとめが高い熱を出して苦しんでいました。彼の家に来られた主イエスは彼女の病気を癒して下さいました。すでにペテロはイエス様を知っていたのです。

ここで主イエスはゲネサレ湖畔に立っておられました。これは「ガリラヤ湖」のことです。カペナウムもその湖畔の町です。すると主イエスのもとに、教えを聞こうとして群衆が押し寄せて来ました。そこで主イエスはシモンの舟に乗り込み、岸から少し漕ぎ出させて、舟の中に腰を下ろし、そこから岸边にいる群衆たちに教えをお語りになったのです。押し寄せる人々から少し距離を取って教えを語るのにこれは丁度よいやり方でした。主イエスは二そうの舟をご覧になり、その内のシモンの舟に乗り込まれたとあります。それも、先ほどのことからうなずけます。主イエスは既に知り合いであり、家に招かれたこともあるシモンの舟を選んで乗り込まれたのです。この時シモンたちは、その後に語られているように、夜通し漁をして引き上げてきた所でした。くたくたに疲れていたと思います。しかし他ならぬ主イエスの頼みなので、喜んでお乗せして、漕ぎ出したのです。主イエスはこうしてシモンの舟から群衆に教えを語られたのです。

群衆は押し迫るようにして「神のことば」を聞いたと1節にあります。これはとても大事なことばです。イエスの語るもの珍しい教えではなくて、神のことばを聞こうとして人々は集まったのです。しかしルカがこのように語るのには、群衆が主イエスの教えをどのように理解していたかを示すためではありません。ここでの主人公はシモン・ペテロです。ルカがここで言おうとしているのは、シモンが、主イエスの語られることばを「神のことば」として聞いたということです。しかもシモンはこの時、その神のことばを、群衆たちとは違う場所、自分の舟の中で、主イエスのすぐ間近で、神のことばを聞いたのです。

主イエスは話し終わるとシモンに、「深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい」5:4とおっしゃいました。このまま沖へ出て網を下ろして魚をとれということです。これは非常に唐突な、また常識外れの話です。そのことは、シモンが「先生。私たちは、夜通し働きましたが、何一つとれませんでした。」5:5と言っていることから分かります。ベテランの漁師であるシモンたちは、夜通し苦勞して漁をしてきたのです。そのように漁は夜中にするものであって、こんな真っ昼間に網を降ろしたって魚が取れるはずはないというのがプロの漁師であるシモンたちの常識でした。主イエスが言われたことは、プロの目から見たら素人のたわ言なのです。しかしシモンは、続けて「でもおことばどおり、網をおろしてみましよう。」と言ったのです。ここにシモンの主イエスに対する深い尊敬と、その語られるおことばの力への信頼あるいは期待が示されています。「他ならぬあなたのおことばですから、おっしゃる通りにしてみましよう」と彼は言ったのです。主イエスのおことば、それは神のことばです。シモンは主イエスのことばを神のことばとして聞いてきたのです。その主イエスのおことばだから、漁は自分の専門分野であり、プロである自分の意見や常識には反することだけれども、主イエスがお語りになる神のことばに聞き従おうという姿勢をシモンは持っていたのです。

彼らが主イエスのおことば通りに沖へ漕ぎ出して網を降ろしてみると、「たくさんの魚が入り、網は破れそうになった。」ということです。そこでもう一そうの舟に助けを求めたところ、二そうの舟に魚がいっぱいになり、その重さで沈みそうになりました。プロの漁師である彼らが一晩中苦勞して様々な工夫

をしても何もとれなかったのに、主イエスのおことば通りにしたら、二そうの舟が溢れるほどの大漁になったのです。シモンたちがこの大漁によって体験したことは、第一に、主イエスがお語りになる神のことばの持つ力です。神のことばは人間の語るどのようなことばよりもはるかに大きな力を持っており、また人間のあらゆる知識、常識を超えてみ業を行うことのできるということです。そして彼らがこの大漁によって体験したもう一つのことばは、主イエスのことばに従うところに与えられる神の圧倒的な恵みです。一晩中苦勞して漁をしても何もとれなかった彼らは、この朝、深い落胆の中にあっただしょう。苦勞が報われず、全くの徒勞に終わったのです。そういう時の疲労感、収穫ある時よりも何倍も大きいものです。そしてこのことは即彼らの収入に響くわけですから、経済的な不安、家族の生活を思っただの心配も大きかったです。そのような落胆、疲労、不安を抱えていたシモンが、主イエスの願いを聞いて再び舟を出し、さらにはおことばに従ってもう一度沖へ出て網を降ろすことまでしたのは驚くべきことです。私たちがらばどうしたのでしょうか。「私は今大変なんです、苦しみや不安が山ほどあるんです。先生の話をお聞いているヒマも余裕もありません。」と断ったとしても不思議はないでしょう。しかしシモンは、主イエスをお乗せして漕ぎ出し、さらに、「おことばどおり、網をおろしてみましよう。」と言ったのです。その結果、この奇跡的大漁が与えられました。彼らはそこに、主イエスを通して与えられた神様の大きな恵みを体験したのです。それは、ただ魚が沢山とれてよかった、ラッキーだった、イエス様と一緒にいると願いをかなえてもらえるというような薄っぺらいご利益としての恵みではありません。魚の重みで舟が沈みそうになったということが象徴的に示しているように、自分のちっぽけな舟には入り切らないような圧倒的に大きな恵みが押し寄せてきて、その重さで舟が沈みそうになる、そのように自分の人生を揺さぶられるような恵みを彼らは体験したのです。

その結果どうなったのでしょうか？　ここが肝心の所なのですが、シモンたちは、この恵みの体験によって弟子になったわけではないのです。この奇跡的大漁、神様の圧倒的な恵みの印を見たシモンは、「イエス様ありがとうございます。私はあなたの弟子になります。ついて行きます」と言ったのではありません。そうではなくて、彼は主イエスの足もとにひれ伏して、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから」と叫んだのです。これは深い恐れ表明です。シモンは、自分が今主イエスと共に舟に乗っていることに深い恐れを覚えたのです。それは、自分が罪深い者だからです。「わたしのような者から離れてください」というのは、「私は罪深い者だから、あなたのみ前に立つことなどできません」ということです。なぜ、み前に立つことができないのでしょうか、それは相手が神だからです。罪深い者は、生ける神様のみ前に立つことはできないのです。つまりシモンはここで初めて、自分が生けるまことの神のみ前にいることに気付いたのです。そしてそのことが分かると同時に、自分が罪深い者であることに気付いたのです。神を知ることと罪深い自分を知ることとはつながっています。彼はこの時まで、平気で主イエスの前に立っていました。主イエスを家にお招きし、また自分の舟にお乗せして、間近に座ってみことばを聞いていたのです。「おことばどおり、網をおろしてみましよう。」なんて言っていたのです。それは、主イエスのことを、神のことばを語ってくれる、立派な、尊敬すべき先生ではあっても、まことの神であられるとは思っていなかったということです。しかし今、この奇跡的大漁によって神様の圧倒的な恵みによって魂を揺さぶられる体験をしたことによって彼は、今自分はまことの神ご自身のみ前にいるのだということに気付かされたのです。そしてそれと同時に、自分は神様の前に平気な顔で立ってられるような者ではない、罪深い者だと気付かされ、ひれ伏さずにはおれなかったのです。

そうすると主イエスはひれ伏したシモンに、「こわがらなくてもよい。」と語りかけられました。「こわ

がらなくてもよい。」というのは、生けるまことの神様との出会いにおいて深い恐れに陥った罪深い人間に対して、神様が語りかけ、彼らを見前に立たせて下さることばです。これは決して、「あなたは罪深い者なんかじゃない、良い人ですよ。そんなに謙遜にしなくていい」という話ではありません。シモンは、そしてシモンのみでなく私たちは、確かに、神様の、主イエスのみ前に立つことに深い恐れを抱かずにはおれない罪深い者なのです。私たちはよく、自分は罪人だと言いますけれども、本当にそう思っていることはあまりないのではないのでしょうか。自分は罪人だと、多少なりとも謙遜な思いで語っている私たちは、自分自身のことが実は本当には分かっていないのです。シモンも、私たちも、主イエスが「こわがらなくてもよい。」と語りかけて下さらなければ、み前に立つことはできない罪人なのです。ですから「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから」とはシモンのまさに罪の告白であり、主イエスの「こわがらなくてもよい。」は、「あなたの罪は赦された」という宣言です。私たちに対する主イエスのおことばとして正確に言い直すならば、「わたしがあなたの罪を全て引き受け、それを背負って十字架にかかって死んだ。それによってあなたの罪は赦された。だから恐れることはない」ということです。主イエスはこのことのためにこの世に来て下さり、十字架の死への道を歩んで下さったのです。

「こわがらなくてもよい。」と語りかけて下さった主イエスは、それに続けて、「これから後、あなたは人間をとるようになるのです。」とおっしゃいました。これは主イエスの招きのことばです。彼ら自身が、罪を赦され、生けるまことの神であられる主イエスと共に生きる者とされた、その恵みへと主イエスが人々を招いて下さる、そのみ業のために主が彼らを用いようとしておられるということです。このおことばによってシモンとその仲間たちは、舟を陸に引き上げ、すべてを捨てて主イエスに従ったのです。主イエスの弟子になったのです。私たちも、これと同じことを体験することによって、主イエスの弟子、つまり信仰者となるのです。そこにおいて決定的なことは、生けるまことの神であられる主イエスと出会い、自分の罪をはっきりと知らされ、その罪の赦しの宣言を聞き、主イエスの招きを受けることなのです。主はまだ主イエスを信じていない方にたいし、自分の罪を告白して、そのすべての罪を赦すために私が十字架にかかり、信じる者を救うと言ったこの私のことばを信じなさいと勧めておられます。またクリスチャンに対して、神様の恵みを深く味わい、癒しをいただくためには互いに罪を告白し合うことが必要であり、その原点は一人一人が活ける神をどのように受け止めているかにかかっています。どこでもそれが出来るわけではありません。教会なら出来るというわけでもありません。そのような安全な主イエスを中心とした交わりが生まれてくるように祈りたいと思います。願わくは当たり前のようにして互いの罪を告白し合い、互いに神はあなたを赦しておられると言い合うことのできる交わりへと導かれますように祈ります。